

令和4年度第1回徳島市立考古資料館協議会抄録

日 時 令和4年8月26日(金) 12:50~15:10
場 所 徳島市立考古資料館 研修室
出席者 協 議 会 中村会長・須藤副会長・菅原委員・宮内委員・杉本委員・
板東委員・湯浅委員
教育委員会 岡田課長補佐・山口管理係長・宮城主査・板東主事・
奥村主事・河田主事
考古資料館 北島館長・倉佐事務長・村田主任学芸員・大粟学芸員

内 容

- 1 市民憲章唱和
- 2 あいさつ(岡田課長補佐・中村会長)
- 3 議題

令和4年度 徳島市立考古資料館事業計画(資料1)

令和4年度 徳島市立考古資料館主要事業概要報告(資料2)

- 令和4年4月1日から令和4年8月11日まで -

その他

主なご意見

令和4年度事業計画及び令和4年度主要事業概要報告等に関して、各委員より様々なご意見をいただきました。主な内容は次のようなものでした。

(= 委員のご意見 = 考古資料館・社会教育課の回答)

常設展示図録の刊行時期についてですが、令和5年度末になるのでしょうか。文化財係と内容を協議のうえ、令和5年度末を期限に刊行を予定しています。常設展示図録の作成は重点課題 関連事業()の一つとありますが、重点課題 について、今回いただいた資料の中で示されていますか。

お渡しした資料『令和4年度事業計画』の中には重点課題 の内容についての記載はありません。

考古資料館重点課題

市民ニーズを的確に把握することにより、市民が求める事業を企画し、積極的に取り組むことで、考古資料館と市民をつなぎ、市民が親しむ開放的な施設とする。

郷土の文化財を次世代に継承し、幼少期よりその価値に対する理解を深めるとともに、青少年の豊かな感性の育成に資するために、学校に対する働きかけを強化するなどにより、青少年の学びの場として活用する施設とする。

徳島市内に所在する様々な歴史・文化遺産の価値を市民に啓発し、市民が共有するために、市民ボランティアを活用したフィールドワーク等の実施を通じて、事業成果を市民に還元する仕組みを推進する施設とする。

以前に提出された指定管理申請関連の資料には記載がありましたが、ポイントとなる事業は参照したいので、その都度に記載していただければと思います。

はい。

イベント関係の参加について、当日受付の先着順といった形で行っていますが、事前申込の枠を外したのでしょうか。

常設展示解説会、考古資料解説会、考古資料館講座については当日受付としておりますが、その他の体験学習等のイベントに関しては事前申込で受け付けています。

体験学習等はコロナ禍以前から事前申込制だったと思うので、全体として従前の受講体制に戻したということでしょうか。

はい。

特別企画展図録等の啓発資料についてですが、特別企画展図録を500部印刷しているとありますが、どのような活用をしていますか。

一般配布を除いた200部については資料借用先や次に資料を借りる施設などに実績として送るほか、予定として国立国会図書館、県立図書館などの施設に寄贈を考えています。

今伺った範囲の配布先であれば、ストックはそれなりの数になりそうですが、県内外の文化財施設等への配布は行っていないのでしょうか。

現在、定期的に送っている施設はありません。

指定管理とはいえ、考古資料館は公の施設ですので、活動内容をアピールするためにも、県内外の文化財施設に配布するなどして、積極的に活用していただければと思います。また、「徳島県内出土石棒集成図録」についてですが、これは令和3年度の特別企画展の関連図録として刊行されたとのことですが、発行が令和4年となっているのは何故でしょうか。

令和3年度の特別企画展は予定していた近畿地方での資料借用が新型コロナウイルス感染症の影響で難しくなったため、急遽借用を県内だけに限定し、それに伴い展示内容も大きく変更しました。そのため当初構想していた図録の内容も大幅に変更しなければならなくなり、展示に注力するため、図録の発刊は断念しました。ただ、特別企画展図録分の発行予算が残っており、特別企画展準備で県内出土石棒資料も揃っていたので、啓発資料という形で集成図録を発刊しました。

そういうことであればなおさら、資料館の事業内容や企画の狙いなどを広く、特に県内の文化財関係の機関や個人に知ってもらうことが重要だと思いますので、図録の活用方法を検討していただきたいです。行政的な視点で見た場合、特別企画展の時期でない発刊である以上、何を目的とした図録であるかを明確に示す必要があると思います。

資料館発行の図録や図書資料の配布についてですが、学校などの教育機関には送っているのでしょうか。

資料館年報に関しては資料館の取り組みを知ってもらうことを目的に市内の小中学校に送付しています。ただ、企画展の図録やパンフレットなどは過去に一、二度送った程度にとどまっています。

先の委員の意見はとても大切なことだと思います。文化財関係機関のほかに教育関連施設にも配布していただきたいと思うのですが、図録やパンフレットも部数が限られていると思います。それなら、まず市内の小中学校、高校の図書室には配るべきだと思って

おり、報告書のような専門性が高いものなら高校以上とか、児童向けの企画展パンフレットなら小学校のみなど、資料の内容によって配布の効果を考え、配布先を何通りかのパターンに仕分けて送るようにはいかがでしょうか。企画展のポスターやチラシの送付も同様でニーズに合った施設に費用対効果も考慮して送るのが肝要かと思います。

今年度の特別企画展は県内の横穴式石室がテーマとなっていますが、資料館の企画展で取り上げる主題を設定するときにはどのような根拠や視点に基づいて行っているのでしょうか。

今年度から指定管理4期目に入りますが、今期の特別企画展は常設展の各コーナーで掲げられているテーマを深く掘り下げて紹介するというのが5年の指定期間を通してのコンセプトとなっています。今回の特別企画展では常設展の横穴式石室の世界という小テーマに基づき、県内の横穴式を持つ古墳を取り上げています。

特別企画展のテーマ選定はどのタイミングで行うのでしょうか。3期の指定期間中に開催された特別企画展で取り上げることのなかったテーマも多いと思うのですが、そういった取りこぼされたテーマを拾い上げて企画展をすることはないのでしょか。

特別企画展のテーマの選定は指定管理申請時に提出する5ヶ年の事業計画立案時に大枠を設定しています。またご意見のとおり、取りこぼしているテーマはいくつもあります。今期の特別企画展のテーマ選定は、一昨年にリニューアルした常設展を活かし、補填する形を基本としています。

では今期の特別企画展のテーマ選定は概ねできているということでしょうか。

はい。

これまでに行われてきた特別企画展を見てきて感じるのですが、テーマの選定に統一感がないというか、資料館で所蔵している資料や調査研究などの他事業とうまく連動していない印象を受けます。また、調査研究活動で今年度は阿波国分寺の出土資料の再整理を行うとのことですが、調査研究活動は指定管理者にとって自主性、独自性の活かせる目玉事業だと思います。前指定管理期に掲げられていた調査研究活動の気延山古墳群調査は最終的にどうなったのでしょうか。

調査当初は分布調査に主軸をおいて現地での踏査、観察を行っていたのですが、私が観察調査した限りにおいて、新たな知見は得られませんでした。後は以前に国府小学校から寄贈していただいた気延山出土の考古資料を図化し令和3年度年報に掲載したものが最終の報告となります。

これまでの協議会での報告の中で、気延山古墳群の調査研究活動の一環として特別企画展「宮谷古墳」、冬季企画展「奥谷1号墳」が取り上げられたと記憶していますが、今回の国分寺に係る調査研究もその成果を企画展に反映されるのでしょうか。

国分寺の企画展は5ヶ年の中で計画しています。

国分寺資料の再整理に係るボランティア活動の実績を見るに後半になるにつれ参加者数が微減しているようです。

コロナ禍のため、参加を見送るボランティアがいるためです。ボランティアグループの熱量が下がったものではないと考えています。

今年度の事業計画を見るに展示公開、教育普及と実に盛り沢山の事業内容で、傍目から見てもオーバーワーク気味に映りますので、企画展と調査研究活動をリンクさせて効率的に事業を進めるなど、ある程度事業内容を整理、仕分けして進める必要があるように感

じます。

教員の委員に質問なのですが学校側で児童たちに資料館活動の紹介などは行っているのでしょうか。

資料館からチラシやポスターなどの広報資料が回ってきたときに担当が伝えているようです。また新型コロナウイルス感染症の影響で学校の活動も委縮しがちですが、前向きに行動することが今は必要だと感じます。

資料館での取り組みと学校とをどうリンクさせていくかを考えていたのですが、今の中学生に考古学への関心や興味がどれほどあるかと問われた場合、正直大きな期待はできないのが実情だと感じます。資料館の企画展チラシやパンフレットを生徒に渡しても、それで資料館に訪れるかというやはり難しく、多様な価値観や新たな技術、情報に溢れている昨今、どのようにすれば従来からある伝統や文化に生徒たちの関心を向けさせることができるのかは課題だと思います。資料館でも企画展や体験学習など、様々な努力をされていますが、生徒が自主的に資料館に足を運ぶには相当の動機づけが必要だと感じます。また、出前授業を頼むにしても様々なカリキュラムで既に埋まっており、総合学習というコマも週1時間ありますが、そこにも余裕はありません。ただ、個人で資料館へとなると先ほど述べたように、相応の動機が必要なのですが、当校の場合、体育館建設時に遺跡が見つかり、多くの遺物が出土したと聞きます。自分の住む身近な場所にある遺跡ということで関心を寄せる生徒もいると思います。ただ、これも個別の要因となるため他校の生徒に普遍的に通じる事象ではありません。教育の現場では熟さなければならぬ多数のカリキュラムがあって、その現状で資料館利用を学校教育とどのようにリンクさせていくのかというのが大きな課題となっているように思います。他校での話ですが、以前遠足で資料館を利用させていただいたことがあり、そのときの生徒たちはとても楽しんでいました。少ないながらもそういった機会を逃すことなく、次の来館につなげ、生徒たちに考古学や徳島の伝統や文化の魅力を伝えることで、一人でも多く生涯にわたる学習のきっかけになれば何よりだと思います。

私は大学で社会科の教員養成コースで考古学を教えています。考古学は地域の古い歴史でとても大事であり、専門的に学ばなくても先生になったときに地域の埋蔵文化財を活かして子どもたちを指導してほしいと学生に伝えています。そういった理念でいろいろと実践的に学生を教えています。教員を目指す学生には食いつきが良く、考古学専攻の学生を教えているわけではないので、そういった手法をとっています。

先ほど委員の意見にあった課題についてですが、青少年の学びの場としての資料館の積極的利用などの実現は資料館側の努力だけでは無理な話で、教育委員会が主導して資料館利用のプログラムを立てて、活用するためのメニューをつくる必要があると考えます。兵庫県にある考古博物館の例ですが、設立時のコンセプトに地域の埋蔵文化財を学校教育でどのように活用するかというのが組み立てられていて、子どもたちへの啓発方法とか体験学習メニューなどを考古の専門家ではなく、学校現場の教員の7名ほどが主となって研究し、学校や教育委員会と議論をしながら進めていて、例えば夏休み期間なら小学生向け、高校生向けのメニューをこしらえ、今では30パターンほどのメニューがあるとのこと。これぐらいしなければ考古学や文化財に愛着を感じ、次世代につながる人材の育成は難しいと感じます。資料館のような職員数の限られた施設では出前授業一つ行うのも大変なわけで、教育委員会が郷土教育、文化財愛護精神の普及に必要な事業に関し、他機関とも協力

しながら支援していく必要があると思います。

学校側で考古学の活用などに取り組んでいただいても単発で終わったり、主導していた先生が異動することでまたふりだしに戻ったりで、長期的な視点で考古学や地域に興味を持ってもらうことができていないのが現状です。委員からいただいた意見のように教育委員会全体でカリキュラムを組めれば一番良いと思いますが、すぐに実現できるかといえば、いろいろと調整の必要な課題でもありますので、教育委員会の中で検討していけたらと思います。埋蔵文化財は地域とつながりの深い分野でもあり、地域教育、地域連携の一環で学校教育に組み込んでいけるのではと考えています。まち歩きなどのフィールドワークを通して、子どもたちに地元の歴史や地域の文化を知ってもらうイベントなどを定期的に行い、資料館、学校、教育委員会全体でも地域学習の機会を提供できればと考えています。

私は高校の教員をしていたことがあるのですが、そのときに勤めていた高校に土器などの遺物をかたどった教材用の模型があり、その模型に交じって本物の土器や埴輪片も紛れ込んでいました。理由を聞くと生徒が地元で拾った遺物を持ち込んだからということでした。その高校周辺には史跡や大学の埋文調査室があったので、見学を兼ねたまち歩きを企画し、生徒960人にまち歩きのチラシを配ったところ、生徒10名、先生8名の応募がありました。文化財に興味関心があっても積極的に活動する子は少ないとは思いますが、潜在的なニーズは必ずあると感じました。文化財関連の仕事に就いていたとき、中学生向けの文化財の教材に関連する情報を整え、総合教育センターのホームページ上に掲載していますので、部分的にでも活用していただければありがたいと思います。中学校にお勤めの委員の話にありました体育館建設時に出てきた出土遺物についてですが、一部でも中学校で展示しているのでしょうか。

いいえ。

私が高校の教員をしていたときの話ですが、土器などの考古遺物のいくつかを市教委から借用し、図書室にあるガラスケース内に展示してありました。数点ではありましたが、興味をもってくれる生徒もいたり、社会科の先生がその遺物を授業で使ったりで活用していて、私が離れた今も継続展示中だそうです。それに関連して思ったのですが、体育館建設で出土した土器を借用展示すれば、身近な場所で出た大昔の遺物ということで興味を持つ生徒も出てくるのではないのでしょうか。

体育館建設後にその中学校を異動してしまい、遺物がどうなったかは分かりませんが、20年ぶりに当該校に戻りましたので確認しておきます。体育館建設当時は遺跡の発掘調査をしているとのことで何が出るのか、生徒や先生も興味津々だったと記憶していますが、建ってしまえば関心は薄れてしまいました。今回委員を受けるにあたり、いただいた資料に目を通して知ったのですが、勤務校の校区が大きな遺跡包蔵地に指定されているとのことで、生徒たちに自分の家が遺跡の上に建っていると教えたら興味を持つ生徒も出てくるかもしれません。興味を抱くには些細なことでも何かきっかけとなることが必要で、そこで何かしらの楽しみを見つけることができれば先へと進めるのではないのでしょうか。

市内中学校の文化祭のときにその中学校の校区内の遺跡から出土した遺物を校内に展示したことがあり、文化祭参加者に興味を持って見てもらえたとのことでした。そういった出張展示を何かのイベントなどに合わせて行い、少しでも地域文化に目を向けてもら

う取り組みも必要だと感じました。また、公的な施設ならば考古資料の貸出も可能ですので、検討いただければと思います。

数日前の新聞のアンケートで徳島県民の県に対する意識が全国最下位だったと出ており、大変残念に感じました。郷土に対する意識を高める取り組みはとても大事であり、どこから取り組んでいくかということですが、それぞれの学校、それぞれの地域で根付いた歴史はあると思うので、それらを掘り起こすことが大事だと思います。

考古学者にならなくても考古学的な物事が身近にあると常識として知っていることが大切だなと感じます。教科書に載っている古い歴史は京都や奈良の話で、徳島は関係ないと思っている子どもも多くいます。そういった子どもたちに考古学的な歴史は京都や奈良だけではなく、身近にあるものだと知ってもらう環境を整えることが学校や資料館の活動として大切なのではないのでしょうか。

街並みも昔と今では大きく変わっています。私が子どものころと今とでも大きく様変わりしました。過去があるから現在があるわけですから、変わり行く街の姿を何らかの形でとどめておくことも必要だと感じます。

先の委員の話で思い出したのですが、県立博物館が「八万を歩こう」という冊子を出していて、博物館ボランティアと協力して地域の歴史を調査し、まとめて作ったそうです。そこで思ったのが、学校の校区ごとにそれぞれ歴史があるので、地域の歴史の概要と寺社、史跡、遺跡などの文化財を掲載したガイドマップ的なものを作ってはいかがでしょうか。どこが主体となって作るかは別として、そういったものがあれば身近な地域や文化財への取っ付きとなるのではないのでしょうか。また、考古資料館周辺のガイドマップも同様に作ってみてはと思います。

資料館協議会と同じ趣旨の他の会に出席したことがあるのですが、そこでもやはり今回同様郷土の啓発が議題にあがっていました。そこで出された郷土史教育の一環としての施設見学については参加した教職員全員、総論では賛成なのですが、実際個別に施設に見学に来てくれるかとなるとカリキュラム消化で多忙であったり、遠方で交通の便の問題であったり、参加者の安全であったりで来館は難しいとなります。郷土教育は大切だし、学習指導要領に資料館博物館を見学することの重要性は記されていますが、様々な要因で難しいようでこれも大きな課題であると思います。とりあえずは出来ることから着実にこなしていくことが必要ではないのでしょうか。そういった機会の提供についてですが、鳥居龍蔵記念博物館のフォーラム発表で聞いた話ですが、工業系高校の生徒が埋蔵文化財センターで行われていた遺跡の発掘体験に参加したことで考古学に目覚めて、史学を学ぶために進路を変えたとの体験が語られていました。つまり、子どもたちの目覚めるきっかけはあちこちにあるわけで、そういった関心の芽を摘んではいけないので、いろいろな選択肢があることを小中学校のころに伝えることはとても大切なことだと思います。